【9】

氏　名（本籍）	王（わん）　海藍（はいらん）（中　国）
学位の種類	博　士（学　術）
学位記番号	博　甲　第　5884　号
学位授与年月日	平成23年4月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	図書館情報メディア研究科
学位論文題目	**村上春樹と中国** —中国における村上春樹の受容研究を中心に—

主　査	筑波大学教授	黒古一夫
副　査	筑波大学教授	綿抜豊昭
副　査	筑波大学教授	平久江祐司
副　査	筑波大学准教授	武者小路澄子
副　査	早稲田大学教授	高橋敏夫

論文の内容の要旨

本研究は、中国においてどのように村上春樹の文学が受容されてきたかについて、2008年の5月から6月にかけて北京、上海、武漢、西安、済南、青島、大連、瀋陽、等の11都市に存在する22大学の学生（院生を含む）3000人（有効回答者数2618人）を対象として行ったアンケート調査の結果を中心に、村上春樹文学の翻訳史、研究史、研究論文データベースの調査結果などと合わせて考察したものである。

序章で本研究の目的や意義、背景、方法等を述べた後、第1章では、村上春樹の作品『ノルウェイの森』（本邦刊行87年）が1989年に漓江出版社から翻訳出版されてから、2009年刊行の『1Q84』が翻訳刊行されるまでの約21年間における翻訳出版史を、萌芽期（1989～1995年）、上昇期（1996～2000年）、全盛期（2001～2006年）、安定期（2007年～現在）までの4期に別け、それぞれどのような作品がどのような形で翻訳刊行されたかを書誌学的な方法を用いて記述する。例えば、上昇期から全盛期にかけて『ノルウェイの森』が外国文学としては異例の150万部（正規版）以上販売され、「村上春樹熱」と言われる村上春樹ブームが起こったことについて、出版史の側面から分析・考察する。また、併せてここではWTO（世界貿易機関）加盟に伴って1991年6月に施行された「中華人民共和国著作権法」の後も絶たれることなく続いている「海賊版」の横行についても触れ、約14億の人口を抱えた中国の出版がいかなる状況にあるかについても考究している。

第2章では、村上春樹の文学が「村上春樹熱」という形でブームになったことから中国の文学界は元より、芸術界や社会全般に与えた影響について、村上春樹の作品が中国において翻訳出版されるようになって以降の文学作品（小説や詩、評論）や音楽、映画のいくつかの作品を取り上げ、それらの作品がいかに中国社会の現在における在り様と深く関係しているか、その作品の内容を分析することによって明らかにする。また、現在、1976年の「改革開放」以後の高度経済成長によって「豊か」になった中国では、「小資（＝プチブル）」という大学卒の中産階級が増加しているが、村上春樹はそのような「小資」の代名詞ともなっており、彼らは村上春樹文学に内在する「孤独感・喪失感・無力感」を味わい、その雰囲気を模倣することが多く、彼ら

をターゲットとした小説や音楽、映画が現在流行している状況について報告する。さらに、以上のような中国社会や文学界への村上春樹文学の影響を考え、そこに内在する「孤独感・喪失感・無力感」は世界共通のものなのではないか、中国の現状が証明している、と結論できるとしている。

第3章では、第2章で述べたような「村上春樹熱（ブーム）」を引き起こした村上春樹文学の中国における受容の実態はいかなるものであったのか、本研究の中核となる「3000人のアンケート調査」結果について、それぞれの設問（全20問）結果をグラフや表にして整理し、その回答がどのような意味を持っているか、分析・考察する。アンケート調査の設問及びその回答について具体的に説明すれば、まず村上春樹の認知度についてであるが、結果として調査対象の90%が村上春樹の名前は知っており、調査した人の5人に3人が村上春樹の作品を読んだことがあると応えている（このように1作家の知名度が異常に高いのは、全く珍しい現象である）。また、その動機については、「友人らから勧められたから」(34%)「流行しているから」(25%)「村上春樹に興味関心を持っているから」(17%) の順で高く、どのような方法（手段）で村上春樹作品を読んだかという質問には、「図書館から借りた」(40%) と「他の人から借りた」(同) が同じ割合で、次が「購入した」(27%) の順になっていた。なお、読後の感想（複数回答）については、「孤独と喪失感に満ちている」(78%) が最も多く、次いで「性描写が多い」(35%)「社会システムや共同体を冷ややかに傍観している」(31%) の順になっていた。なお、他の設問で、どのような日本文学の作家を知っているか（読んだことがあるか）というものでは、ノーベル文学賞作家の川端康成や大江健三郎を抜いて村上春樹が断然トップであり、村上春樹の翻訳刊行されている35作品のうち読んだことがあるのは『ノルウェイの森』で、2位の『海辺のカフカ』を遙かに引き離している、というような実態も明らかにされている。その結果、中国における「村上春樹熱」は、実は『ノルウェイの森』熱であった、と結論づけられるとする。

第4章は、中国において現在どの程度村上春樹の文学について研究が進んでいるのかについての調査報告で、1989年に村上春樹の作品（『ノルウェイの森』）が中国の文学界に最初に登場してから約21年間で、雑誌論文（翻訳・紹介なども含む）が202本、学位論文（修士・博士）が56本書かれるという状況にあることが明らかにされる。また、村上春樹に関する研究書も14種あり、そのうち日本、アメリカ、台湾から輸入（翻訳出版）されたものが7種で、現在は中国人による本格的な村上春樹文学の研究は比較的少ない状態にある。なお、研究論文のうち日本語で書かれたものが13本あることもわかり、それらは日本における村上春樹研究の影響から「都市文学」「ポストモダン文学」などの視点から考究される傾向にあることも判明している。

第5章では、「村上春樹と中国」との関係について考究し、村上春樹の多くの作品に「中国」が登場するが、それは村上春樹が『史記』（司馬遷著）から『中国の赤い星』（エドガー・スノー著）まで中国の歴史や文学（文化）に詳しいことの反映ではないか、村上春樹はそれらを作品内に使用することで、作品理解を助けようとしているのではないか、と仮説を立てる。ところが、一方で村上春樹は中国料理が全く苦手で、ほとんど口にしたことがない事実から、この矛盾は村上春樹文学の理解とどのように関わっているのか不明であるとの結論に至る。

最後に問題点として、中国における「小資」は大学生だけでなく高校生や若いサラリーマンに対しても言われている言葉なのに、それらの若年層への調査ができなかったこと、および村上春樹文学について「定量」的な分析（アンケート調査の結果分析）はできたが、「定性」的な分析である「作品研究」（「作家研究」）が不十分であったこと、また日本の他の近現代文学作家との比較研究が十分になされなかったことの3点を上げる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の審査に当たっては、主に以下の点に焦点化され議論されたので、そのことを項目ごとに記述し、「批評」とする。

1. 研究目的について

本研究は、論文の副題が示すように、中国において村上春樹の文学がどのように受容されてきたか、について考究したものであり、この研究の基底（中核）になっているのは2008年5月から6月にかけて北京、上海、武漢、西安、済南、青島、大連、瀋陽など11都市に存在する22大学の3000人（有効回答者数2618人）の学生（院生を含む）を対象に行ったアンケート調査である。このような1作家に対する大規模な調査は、日本のみならず中国及び世界でも初めてのものであり、その調査結果の集計・分析・考察とともに高く評価されるものである。調査結果から、2000年前後から中国社会だけでなく日本でも取り沙汰されるようになった「村上春樹熱（ブーム）」が、実は『ノルウェイの森』ブームであったことが明らかにされたが、本研究はこのような「村上春樹熱」の原因解明だけでなく、村上春樹の文学がいつ頃から中国社会に紹介され、若年層や文学界、音楽界、映画界などにどのように影響を与えたのか、及び村上春樹文学の研究はどのように進捗しているのか、また村上春樹個人と中国との関係はどのようになっていたのか、というようなことも研究目的としており、その目的に沿った本研究「中国おける村上春樹の受容」に関しては日本人の研究者も知らなかったことがいくつか明らかにされており、目的は達成されている、と認められた。

2. 研究方法について

アンケート調査の結果や手に入れた「資料」（村上春樹の中国語訳刊本やCD、映画情報）、及び各種のデータベースからの情報（最終的には現物確認を行った）、公共図書館や大学図書館における所蔵情報などを駆使した本研究は、それまで漠然としていた「中国における村上春樹の受容」に関して、資料的・データ的にその実情を明らかにするものであり、そのような大規模かつ網羅的な1作家に対する研究はこれまでにないものであって、その点で中国における村上春樹研究及び日本・世界の村上春樹研究に寄与するものとして、高く評価できるとされた。特に、「中国における村上春樹」の研究において先達となってきた東大教授（中国文学・比較文学専攻）藤井省三氏の『村上春樹のなかの中国』（07年　朝日新聞社刊）における「誤り」や「曖昧な点」を資料的な側面から正した点は、本研究の成果の一つとして高く評価できるとされた。

3. 研究内容について

(1) 成果と弱点について――3000人の学生（院生を含む）を対象としたアンケート調査や研究論文データベースを利用した調査、及び手に入れた資料を基にした「中国おける村上春樹の受容」に関する研究、つまり「定量」的な研究については、すでに述べたように一定程度の成果を得ることができ、それはまたかなり高い評価を得るものであったが、筆者が「本研究の問題」や「今後の課題」のところでも明らかにしているように、文学的研究にとって欠かすことのできない「定性」的研究、言い方を換えれば「作品研究」や「作家研究」の側面がやや疎かにされている、という批判があった。つまり、中国においてどのように村上春樹の文学が受容されてきたのかについて、「村上春樹熱」の中核を担った『ノルウェイの森』については、その作品内容に踏み込んで分析・考察がなされていたが、処女作の『風の歌を聴け』をはじめとする「鼠三部作＝初期三部作」や問題作と言われている『ねじまき鳥クロニクル』、『海辺のカフカ』、『アフターダーク』などの作品内容について、本研究ではほとんど触れられていないという弱点を持つ、というような批判である。このことは、本研究の最大の弱点と言っていいだろう。

(2) 第5章の「村上春樹と中国」との関係について――村上春樹が先のアジア・太平洋戦争（15年戦争）に関わって中国に対して「贖罪意識」を持っているのではないか、あるいは中国及び中国人に対して「揶揄」するような考え方があるのではないか、という議論に対して、中国において圧倒的な人気を持って受容され

ている村上春樹（とその文学）の現実と、それらの議論との整合性が本研究では十分に証明されているとは言えず、論究の底が浅いのではないか、という意見もあった。

(3) 新規性・独創性について――本研究における新規性・独創性は、何よりも中国の 11 都市の 22 大学に学ぶ 3000 人の学生を対象に「村上春樹の受容」についてアンケート調査を行い、その結果をグラフや表で明示した点にある。このような村上春樹に関する大規模な調査はこれまでになく、その意味では世界的な規模で村上春樹研究に寄与するのではないか、と考えられる。同じように「中国における村上春樹の受容」に関しても、その翻訳出版史の側面から詳細な資料を分析・考察しており、今後の中国における村上春樹文学の受容史及び研究史に足跡を残すものになっている。「事実」（調査結果）に基づく「中国における村上春樹の受容」に関わる現状分析という点でも、本研究は村上春樹研究に大いに寄与するのではないか、と思われる。これらの点については、審査委員全員が一致して評価した。

平成 23 年 3 月 3 日、図書館情報メディア研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き「図書館情報メディア研究科博士後期課程の学位論文の審査に関する内規」第 12 項第 2 号に基づく最終試験を行い、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。